
山中獅堂

辛未

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山中獅堂

【Zコード】

N6386D

【作者名】

辛未

【あらすじ】

地球ではない人界。天さえ従えるという仙人・山中獅堂と、その従士の、ある日の出来事。

やまなかのじとう
山中獅堂。

一息吐けば千の谷を作り。

一步動けば万里を行き。

一目見れば億を明かす。

仙人・山中獅堂。

天を従え、地が脅え、龍が傳ぐ。

仙人・山中獅堂。

その人は今。

NEETだ。

「…なんだこのグダグダな出オチは」
ぼくは鍋を運びながら呟いた。

小高い針岩の頂上にある土壁の小さな家。
その家のベッドで、一人の少女が寝息を。

「ぐごおー。ぐげえー」

否、軒を立てていた。

長い黒髪、淡色の十一单。

この少女こそ、ぼく、沢木輪廻の師であり主、仙人・山中獅堂その人だ。

山中獅堂と言う名前で男と思われやすいが、彼女は立派な女だ。
仙人だけあって万年を生きた、と言われるが。
このヴァ力幼女を見ているとそうとは思えない。

ぼくは“包帯で覆われた右目”を擦り、はあ、と溜息を吐く。
何故こんな人の従士になってしまったのだろうか…。

「おい、ヴァ力弟子」

と。いきなり軒を止めた師匠がぼくに語り掛けてきたのはつい今

」と。

「は。師匠」

「ヴァ力幼女とは何だヴァ力幼女とは」

： 読んでたのか。

「貴様、私を誰だと思っておる。万の時を越えて世を据える仙人サ
マであるぞ？ 徒士如きが隠し事できると思つておつたのか」
面倒臭え師匠だ。

「ん？ 輪廻？ 死にたいのか？」

ずきん。

熊も殺せそうな幼い少女の丸い瞳の眼光を受けた時、ぼくの右目に
強い痛みが走った。

「いえ。滅相も無い」

ぼくは右目の痛みを隠しながら答えた。

「…ふん、面白く無いのぉ。痛がらんか」

「ドS仙人め。絶対痛がらねえ」

と、ぼくが毒吐くと、師匠はぼくから口を放した。

「…おい、輪廻」

「…なんです師匠」

「酒は無いか？」

「在りません。先日呑み終つてしましましたからね。買つてきまし
ょうか？」

「…そんなところだけ素直でどうする。私も行こう。偶には里に顔
でも出さねば死んだと思われてしまう」

そんな事在り得ねえよ。殺しても死ななそうな面しやがつて。

「…裏表激しそぎるぞ、輪廻」

そこは山里。人里。山間の人里。

名は無い。小さな集落だ。針山に囲まれた田舎。しかし、巨大な「
国」同士の境にある為、様々な物品が集まり、小さいながら豊かで
ある。

「さあ、輪廻よ。酒を買つぞ」

そこで、師匠は仁王立ちしながらぼくにそう告げた

「いいですが、金はどうします？」

ぼくは師匠をななめ後ろから見下ろして答えた。

「働け」

「お前が働け」

「ち。従士の癖に生意氣で不忠な男だ」

そう言うと師匠はある酒場に向かう。

酒場の角。一つの卓で4人の男が賭けをやっていた。

師匠はその男たちに近付く。

「おい」

師匠が呼びかけると男たちは師匠を見て、ニヤリと笑う。

「お。獅堂様じやねえですか。どうしたんで？」

「ふん。簡単な事だ。私も混ぜてもらおうか」

4人の男は顔を見合させ、それから了解の合図を出した。

「で?どんな賭けをやってるんだ?」

「何、簡単な事であ。一、二、三つの^{サイ}賽を転がして、出た目に一番近い数字を言つたヤツが勝ちってモンでぞ」

「ほう。賭け金は?」

「一口3000」

「妥当な所だな」

師匠はぼくに近くから椅子を持つてこさせると、その椅子に座つて卓の上の賽を見た。

「さあ、入れます!」

4人の中でも一番屈強な男が籠に賽を振り入れ、卓に叩きつけて回した。

「さあ、張つた張つた!!」

「12。」

「16だ!!」

「10!!」

「3！！」

3人の男がそう叫び。

師匠は。

「12」

と呟いた。

その後。泣き崩れる3人の男と酒屋に向かう師匠の姿があった。

「こ、こうなれば踏み倒すしか…」

「あれを見て、まだそれが言えるか？」

そう1人の男が指した先には6つの大樽を片手で担ぎ、にこやかに

笑う師匠。

「…無理」

踏み倒し案は踏み倒された。

「ほれ。請求書だ。3人で仲良く払え」

「…何年分の酒だ、これ」

…あの量では1月と持つまい…。

「ほれ、輪廻。持て。帰るぞ」

師匠は1つ、酒樽を投げてよこした。ズシリと重い酒樽を何とか受け取る。

「…師匠、いいのですか？」

ぼくは酒場から去る師匠に、後ろから付いて行きながら尋ねる。

「何がだ？」

「あの博打、“賽の目が見える”人間は参加してはいけないので

？」

そう言うと師匠は鼻で笑った。

「私は人間ではない。仙人だ。忘れるでない」

：屁理屈仙人。

「生意氣徒士」

と。そんな会話をしていた時。

「し、獅堂様！！」

村はずれで、1人の村人が師匠を呼び止めた。

「何だ、騒々しい奴だ」

酒を持ち帰る所を邪魔されたからか、不機嫌に師匠はその村人を振り返った。

「い、今、行商の者が、この村に来るまでに龍神様を見たと……」「だからどうした。大方、龍脈にでも当たりに来たのだろう」

「いえ、それが…この村に向かつて来ていると言う事です！」

村人の答えにふと耳を傾ける。もし、龍の目的が師匠の言う通りならば、この辺りの龍脈は“人の氣で乱された”この集落しかない。

「…目的は、この集落か…」

師匠はニヤリと笑う。

「しかし、この集落では仙人でもなければ力を得られないはずです」「ぼくは直ぐに師匠に意見した。

「戯け。^{たわ} その様な事は既に解り切つてあるわ。のう、輪廻。貴様ならどうする？」

ニヤニヤと可笑しそうに笑つて、師匠はぼくに尋ねた。

.....。

「人の氣が邪魔ならば、ソレを滅ぼせばいい。そうだろう？・輪廻

「…ぼくはそんな事しませんよ」

「そうか。ならば、聖獸ならばするかの？」

「するでしよう。アレは、人を小石程度にしか思っていない」

そんな会話をしていると、呼びに来た村人の顔がどんどん青褪めていった。

「ああ、やっぱり長老の言つた通りだ…」

遂には頭を抱え、蹲る村人。

「あ？あのジジイ、解つてたのか？」

「え、あ、はい…」

「なら何故直ぐにあのジジイの所に連れて行かない？」

「ああ、その、長老は自分が呼んだら獅堂様は素直に来てくれない

から、と…」

その答えに固まる師匠。

「見破られますよ、師匠」

「ち、あの死損いが…」

流石。太上老君の名は伊達ではない、と言つた所か。
師匠は直ぐに不機嫌な顔になり、

「ふむ。気に食わん。帰るぞ、輪廻」と、踵を返した。

「あ！獅堂様！！」

村人が呼び止める声も聞かず歩き出す師匠。

「ふん。そんな事を言つたジジイを怨

「あの村が無くなつたら何処に酒を買いに行くんです？」
ぴたつ。

師匠は固まつた。

「…ち、此処まで御見通おみどおしか」

「年の功ですね」

「つるさい。行くぞ、輪廻」

師匠は酒樽をその場に置いて、もと来た道を戻つた。

「そう言われても、ここを立ち退く事は出来ませぬ」

長い顎鬚を蓄えた老人が、空に向かつて答えた。

『太上老君よ、儂とて此処で貴様等を殺す事は本意ではない。ほんの数百年、立ち退けと言つておるだけだ』

空に飛ぶ谷の様な、深碧しんべきの鱗を持つ龍はそう答えた。

龍の身体はその集落を覆い隠すほどに大きく、とぐろを巻けば山となるかの如く長い。

その龍と対峙する老人の周りには、村人達が不安顔でただただ取り巻いていた。

「数百年、それだけ在れば我々は朽ちてしましまする」

『太上老君よ。此處で儂が言葉を交わしているのは貴様の顔を立て、
そのか細き命を延ばそうと言う慈悲からなのだ』

龍は顔を村に 老人に近付け、そう言つ。

『これ以上、我の言葉を煩わせる様ならこの村など消してよいのだぞ?』

「…」

老人は龍の言葉に黙り込む。

『…飽くまでも退く氣は無い、か…。良からう』

龍は顔を上げ、直立するように村を見る。

村人達の心に、一筋の恐怖を植えつけるように。

ギヤオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!

!!

咆哮。村が震え、風が猛る。

地が舞い、露店が吹き飛ぶ。

龍の咆哮は天災の一。

嵐の様な風が、家々を破壊し始めた、その時。

「耳障りな啼き声だ。よからう、輪廻。“許可する”」

1人の少女の呟く様な声が、辺りに響いた。

その声に答えるように、人込を搔き分け、青年は村人達と、龍の間に立つ。

右目を覆う包帯を取り払い、龍に対峙する。

「山中獅堂が徒士、沢木輪廻。推して参る」

龍は、その名に口を閉じる。

『…貴様…輪廻か』

「龍神よ、去れ。我も今は人の身。貴様を殺す事は忍びない」

青年は右手を龍に翳してそう告げた。

『ほぞけ、負け馬が…貴様の様な脆弱な聖獣に、儂が従うと思つたか…!』

「…ならば死ね。子蛇」

龍はその顎門あごどを青年に向け、噛み碎いた。

「ゴオツ…！」

激しい風が、轟音を立てる。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ…！」

風の轟音を切り裂いて、風が爆ぜる音がした。

閃光が飛び散り、青年に噛み付いたままの龍の体が震え、燃え上がった。

青い火を宿し、崩れ落ちる龍。

『ぐオおオ…オおおオオ…！』

龍はその牙で貫けなかつた青年を弾き飛ばし、民衆の中に居る少女を狙つて牙を出した。

「師匠…！」

弾かれた青年は、火花を散らしながらも少女を呼ぶ。

少女は、その時に在つても動ぜず、不敵に笑い。

「恥さらしが…身の程を知れ、子蛇」

「ばきいい！」

乾いた音が、辺りに鳴り響く。

少女が向かつてきた龍の牙に、ただ一振り、腕を振るつただけで、

龍の牙は、1本残らず徹底的に碎かれた。

『…！？』

「牙を碎かれては、喋る事も在るまい？」

少女はまだ、不敵に笑い。

一閃。

「ゴツ…！」

回し蹴りを放つた。

龍は弾け飛び、山や谷を超える巨体が宙を舞つ。

舞つた龍は村に着地する。その先には青年が待つ。

「…我が“命”に手を出したのだ。死して後悔せよ
それだけ吐いて、青年は“蒼い石”的埋め込まれた右田で、龍を睨む。

びし。

龍の身体に青い亀裂。白い稻妻がそこから漏れ出す。そして。

バリビリツバガツビシ…ジリイイイイイ！

決壊。龍の身体は稻妻に呑まれ、無数の塵と化した。

「ふん。誰に歯向かつておる。私は山中獅堂、仙人だぞ？」

少女はただ一言、何も無い空間にそれだけ言って、忽然と姿を消す。
龍の死に沸く村の中に、青年は居なかつた。

「ふおつふおつふおつ。お邪魔しどつたぞ？」

針山の上、ぼくらの家。

龍を殺して帰つてきたぼくらの前に、瓢箪から酒を呑む太上老君
様が居た。

「…貴様、何故此処にある」

師匠はキレ気味の声で太上老君様に問つた。

「何、偶には弟子と酒を交わすもアリかと思つての。ふおつふおつ
ふおつ」

「この糞ジジイ…今すぐ此処ですり身にしてくれるわ…！」

意氣込む師匠に一言。

「勝てるんですか？」

師匠は固まり、ちょこちょこと歩いて卓に座つた。

「…輪廻、盆」

「は。只今」

ぼくは台所に盆を取りに行く。

「呪まわしいジジイが。何の用だ」

私はジジイに問う。

「言つたじやうつ。酒を交わしに来ただけじゃと」

「戯け。貴様がそれだけの為にここに来るなどと、その様な戯言が
私に通ずるとでも思つたか」

「…厳しいの、我が弟子、獅堂よ」

「これは貴様譲りだ、我が師、太上老君よ」

「…何、1つ聞きに来ただけじゃよ」

「…」

「輪廻とは、仲良くやつとるかとな…」

私は台所を見る。此処からでは見えないが、輪廻は恐らくまだ盃を探している。

「…当たり前だらう。貴様の“孫”だ。素直で、いい徒士だよ」

「…せうか。…ではの」

ジジイはそう言つて、瓢箪を持ち、立ち上がつた。

「何だ、本当に帰るのか」

「そう言つたじやうつ」

太上老君は家の戸に手を掛け、ふと振り返つた。

「夜の方はあまり無理すると体が壊れるぞい」

盛大にズッこけ、私は戸に向かつて吼えた。

「この変態糞ジジイ…！」

戸が開いた形跡もなく、ジジイは消え失せていた。

ぼくが戻ると、太上老君様は居らず、師匠だけが、真っ赤な顔で卓に座つていた。

「…太上老君様は？」

「…帰つたよ」

さつきから師匠がぼくと田を合わせない。とりあえずぼくは師匠の前に盃を置き、師匠と向かい合つように座つて、師匠に酒を注いだ。

「…ん」

師匠はぼくから徳利をひつたくり、ぼくの盃に（本当に珍しい事に）

酒を注いだ。

「…ま、呑みましょう」

「そうだな」

その日は、朝まで呑み明かした。

山中獅堂。

一息吐けば千の谷を作り。
一步動けば万里を行き。
一目見れば億を明かす。

仙人・山中獅堂。

天を従え、地が脅え、龍が傳ぐ。

仙人・山中獅堂。

その人は今。

ぼくの師であり、ぼくの“命”^{あるじ}だ。

(後書き)

はい。辛未です。連載中作品ほっぽって、こんなん投稿しました。
さつさと連載再開しろ。つてな感じですね。

さて、此処では1つ2つ、解説をしたいと思います。
まず、主人公達の住む『針山』と言うのはですね、中国の桂林とか
にある細い山、あれの物凄い細いヤツです。そのつもりで書きまし
た。細いといつても頂上には5坪ぐらいの平地があって、そこには
松とか生えてる、そんな感じの場所です。そこに家が在ります。
登場人物について解説。

まず山中獅堂。

元妖艶な美女、現幼女。

百二十五年前に聖獸・麒麟を従えた際、ほぼ全ての力を使い切った
為体が幼く。
仙術の類も使えなくなつた。

ただし、今でも五千年もの間鍛え続けた怪力と武術は健在。小さな
体躯故にリーチは短いがその拳はいとも簡単に山を割る。
最強の仙人としても今だ名が轟き、百年級の仙人では今の獅堂です
ら太刀打ち出来ない。という裏設定。

沢木輪廻。

雷獸と麒麟の合せ子。稻妻を呼ぶ麒麟であり、聖獸の中でも最も強
いとされる。

今は獅堂に名前を与えられ、稻妻も右目に封じられた。「主従契約
の呪」の呪により獅堂に逆らえない上に獅堂の許可が無ければ力が
出ない。

この物語では麒麟は最高位の聖獸とされる。太上老君の孫の死体を
憑代に封印されている。と言う裏設定。

太上老君。

筆者が出したかつただけ。一応獅堂の師。

とまあ、こんな感じで。あとは脳内補完で。
多分このあとがきを読んだ人の方が稀有なのでは……？
本編より、あとがきを読んでくれた方、感謝です。
辛未でした、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6386d/>

山中獅堂

2011年1月22日02時52分発行